



Title	「ロシア人の日本観」と「日本人のロシア観」のギャップに関する考察：日ロ両国の新聞記事('90~'96)による比較
Author(s)	ヴァルーエフ, ウラジーミル
Citation	大阪大学言語文化学. 1997, 6, p. 5-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78088
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「ロシア人の日本観」と「日本人のロシア観」の ギャップに関する考察

一日口両国の新聞記事（'90～'96）による比較—*

ウラジーミル・ヴァルーエフ **

В сфере политики интенсивны следующие имиджи. Япония в России: “напичканная американскими военными базами” орбита доминирования Америки; жертва атомной бомбардировки (коннотат сочувствия); Япония, “настырно требующая северных территорий”. Россия в Японии: “открывшая железный занавес” Россия; “опасная перестройка” — политический хаос, непрогнозируемость; не возвращающая северных территорий Россия.

В круге экономики резко очерчены имидж Японии как “экономического чуда” (коннотат уважения), имидж прогрессивно худшающей экономики России (коннотат иронии).

В орбите культуры отчетливы имидж Японии как “переплетения современности и традиций”, имидж России как “освободившихся русских”.

Имидж Японии в России, в целом позитивный, слабо интенсивен в мозаике зарубежных имиджей. Имидж России в Японии негативен, сильно интенсивен.

1 はじめに

1990年代に入り今日にいたるまでの間に、日本の隣国ロシア（旧ソ連）におい

*Имидж Японии в России, имидж России и Японии и GAP между ними: по материалам газет Российской Федерации и Японии 1990-1996гг. (Валуев Владимир)

**言語文化研究科博士後期課程

ては1980年代後半に始まった民主化政策（ペレストロイカ）が定着し、ついに社会主義体制が崩壊、そして、新生ロシア時代が始まった。ロシア人、日本人の間にあったイデオロギーの対立が消え、日ロ関係が変化しつつあるこの時期、ロシア人、日本人が互いに対して抱いてきたイメージにも果たして何らかの変化がもたらされたのであろうか。本稿では、1990年から1996年9月までにロシアのプラウダ紙に書かれた日本に関する記事、日本の朝日新聞に書かれたロシア（旧ソ連）に関する記事を検討し、この時期のロシア人の日本に対する、日本人のロシアに対する認識・評価について、そして、そのギャップについて考察していく。

2 イメージの変遷

まずはソ連・ペレストロイカ期までの間にロシア人が日本と日本人に対して、そして日本人がロシアとロシア人に対して抱いてきたイメージについて振り返ってみよう。

2.1 ロシア人の対日イメージの変遷

日ロ間に正式な国家間の交渉が始まったのは18世紀頃のことであった¹⁾。1804年にはニコライ・レザーノフ遣日使節が長崎を訪れている。その前年のレザーノフ出発を報じた雑誌『ヨーロッパ報知（Вестник Европы）』の記事には日本について“日本は島国で、ここでは産業も人々の無知も同じ位に驚異的で、また想像を絶するほどの完璧さの水準に達する技術もある一方で、知恵はまだまだ赤ん坊並である”という紹介がある²⁾。日ロ交渉が始まって最初の頃のロシア人の日本についての認識はその程度のものであった。しかし、既にこの頃からロシア人が日本の“技術”を評価している点が興味深い。このロシア人の日本への評価は、長い年月を経た現在でも非常に根強いからである。

その後の日露戦争時でさえもロシア人が日本に抱くイメージは比較的ポジティブであったと言える。日露戦争中にロシアで出版されたある百科事典の“日本”の記述を読むと面白い。ここには日本人について“好戦的な侵略者”という日露戦争時らしい批判的な説明もある一方で、“勤勉”“まじめ”“他のアジア人とは

¹⁾ 志水速雄『日本人はなぜロシアが嫌いか』山手書房新社、1992年、95頁。

²⁾ С. И. Новаковский, Япония и Россия, Токио, 1918, стр. 73.

違って理知的”という評価もある³⁾。

やがて第二次世界大戦の頃になると、先の“好戦的な侵略者”のイメージが“ファシズム・軍国主義の国”へとさらに大きくなっていった。しかし、大戦後はやや同情的なものになった。“米国に破壊され、原爆を落とされ、占領された国”という、いわゆる“米国の被害国”としての同情的な見方が出てきたのである⁴⁾。それは冷戦関係にあった米国への批判的な見方や、第二次大戦の悲惨さを知る国としての同情心から出てきたものであった。

やがて1960年代になると、“急激な経済成長を遂げた国”という日本への評価が現われ出す。そして、もう一方で、日本の“激しい学生・労働者運動”への共感（実際には、こういった運動の多くはソ連の社会主義とは思想の異なるものであったにもかかわらず）と運動の結果生じる“革命的状況”への期待、資本主義の矛盾が生み出した“生活環境悪化”が日本のイメージの中に現われ、ソ連の社会主義思想の影響が見受けられた⁵⁾。

その後、1970年代以降は“世界第三の工業国”としてさらにロシア人の日本への評価は高まった。また、日本人が急激に近代化を進める一方で、伝統的な生活様式も失わず守っている点にロシア人の多くは驚いた。日本は先進国でありながらも“お人形のような女性”“お辞儀”“古いお寺”のある“おとぎ話の国”のような面も合わせ持っている不思議な国である、という印象を与えた。以降、こういったイメージが長く続いていく⁶⁾。

2.2 日本人の対ロイメージの変遷

さて、日本人の対ロイメージの方は、両国の関係が始まった当初から好ましいものではなかった。日本人は江戸期にはロシアのことを“北方の脅威”とみなし、ロシア人の日本への接近を恐れ警戒した⁷⁾。このロシアに対する漠然とした恐怖感、明治・大正期には、日露戦争の経験を経てさらに“野蛮な敵国”というイメージへと延長されていった。しかし、この頃もう一方で、ロシアの文学作品が日本に紹介され、それらが知識人たちに高く評価されていくにつれて“偉大な文

³⁾ Энциклопедический Словарь, Т. 82, С.-Петербург, Типография Брокгауз-Ефрон, 1904, стр. 722, 738, 751.

⁴⁾ Большая Советская Энциклопедия, 2-е изд, Т. 49, М., 1957, стр. 610.

⁵⁾ Современная Япония, Справочник, М., Наука, 1968, стр. 118-122.

⁶⁾ В. Овчинников, Японская Панорама, М., Планета, 1975, стр. 7-9, 71-72.

⁷⁾ 志水速雄「日本人はなぜロシアが嫌いか」、1～2頁。

学の国”という尊敬の念も生まれていた。さらには、ロシア文学を通して伝えられるロシアの“おおらかな民衆”“広大で美しい自然”は“ロマンチックな国”というイメージを生み出した⁸⁾。

やがて革命によりソ連が成立すると、日本人の対ロイメージは“ロシアのイメージ”と“ソ連のイメージ”に分裂していく。先のポジティブなイメージは“ロシアのイメージ”へと、“野蛮な敵国”といったネガティブなイメージは“ソ連のイメージ”へと受け継がれていくことになる。スターリンの恐怖政治の噂は“ソ連のイメージ”をさらにネガティブにした。しかし、もう一方でソ連に“理想の国”のイメージを抱き、憧れを持つ知識人たちもいた。こうして矛盾したイメージが互いに交錯し合い存在するようになった。

しかし、第二次世界大戦後はネガティブな“ソ連のイメージ”が圧倒的に強くなる。日ソ中立条約違反、ソ連軍による満洲の日本人住民に対する蛮行、日本兵シベリア抑留、北方領土占領といった、いわゆる“ソ連から多大な被害を受けた”という自らの経験から、日本人は“恐るべき大国ソ連”というイメージを急激に増大させるようになった。やがて米ソ冷戦、中ソ対立、ソ連のアフガニスタン侵攻が起これ、**“軍事大国ソ連”**というイメージが強烈になり、また、相次ぐソ連市民の亡命事件や亡命芸術家たちの活躍によって、**“自由のない社会主義大国”**というイメージが広がっていった⁹⁾。**“軍事大国ソ連”** **“自由のない社会主義大国”**のこれら二つのイメージは、以降、長く続いていくことになった。

3 プラウダ紙、朝日新聞の記事の分析から

以上のように、互いのイメージの変遷を追って見ると、そこには既に両国の関係開始の時点から大きなギャップがあったことに気がつく。つまり、ロシア人の対日イメージは早い時期から比較的ポジティブであったが、しかし、それとは正反対に、日本人の対ロイメージはだいたいにおいてネガティブであった。特に“ソ連のイメージ”は、ロシアという国の存在の影を薄れさせるほどに強烈で最悪なものであった。

現在はもう、この“ソ連”は消滅し、過去のものである。ソ連時代とは違い、

⁸⁾ 同上、1～3頁。

⁹⁾ 同上、4頁、173頁。

今のロシアでは一般市民でも日本に関するありとあらゆる情報を得ることができる。そして、日本では今、長い間“ソ連”という名で呼ばれてきた北方の隣国が、再び“ロシア”という名で認識されようとしている。既に両国の状況が変わってしまった現在、互いに対するイメージは一体どのようになっているのであろうか。ここからが本研究の扱うところである

さて、マスメディアが外国について報道する場合、そこには概して、このマスメディアを利用する国の国民がその外国に対して抱いているイメージが反映されているものである。そこで今回、新聞というマスメディアをもとに、現在、日ロ両国民が互いに対し抱いているイメージについて探っていきたいと思う。つまり、ロシアの対日報道、日本の対ロ報道に反映される現在の互いのイメージについて検討していく。今回の分析には知名度の高さと読者の多さを理由に、ロシアからはプラウダ紙、日本からは朝日新聞を用いた。

その方法であるが、まず、プラウダ紙の日本に関する記事、朝日新聞のロシア(旧ソ連)に関する記事の内容の主たる傾向を分析する。これは、記事を政治、経済、文化と大きく三つの分野に分けて行なう。次に、各分野に見られる傾向を挙げ、そこに反映されたイメージについて考えていく。そして、最後に、それらを総合的に見た結果から、現在のロシア人の日本観、日本人のロシア観とそのギャップについて論じていく。

3.1 政治

まず、プラウダ紙の日本に関する記事の内容には主に以下の三つの傾向が見られる。

- (1) 日本を米国の勢力下にある国として伝えている。例えば、「変わる世界の中の隣人たち」(1991年4月9日)は、第二次大戦後、日本は援助国米国のアジア太平洋地域における政治・軍事活動拠点として巧みに利用されてきたと指摘している。
- (2) 日本を第二次大戦の犠牲国として伝えている。例えば、「長崎、原爆の影」(1990年1月4日)は、原爆の悲劇を語り伝え、平和の尊さを訴える長崎の人々について伝えている。
- (3) 日本に対して“北方領土にやや固執しすぎ”と批判的である。例えば、「ロシ

アはセリにかけられぬ」(1992年5月19日)は、日本の執拗な北方領土返還要求やそれに賛同するロシアの一部のジャーナリストたちを非難し、豊富な資源やロシア兵の墓地のある北方領土を日本に譲るべきではないと主張している。

以上の傾向は次のように解釈される。まず、(1)は、米ソ冷戦を背景にロシア人が米国勢力の一部として日本に関心を示してきたことを表わしている。次に、(2)は、第二次大戦時に膨大な数の犠牲者を出した経験から、ロシア人が同様の経験を持つ日本人に対し親近感を抱いていることを表している。そして、(3)は、ロシア人が日本から“北方領土問題にやや執拗”という印象を受けていることを表している。つまり、これらの傾向からは、現在のロシア人の対日イメージの中に、“米国勢力圏の一国”“同じ第二次世界大戦の犠牲国”“北方領土問題にやや執拗”といったものが含まれていると理解されるのである。

次に朝日新聞のロシア・ソ連に関する記事の内容には主に以下の三つの傾向が見られる。

- (1) ソ連崩壊後のロシアの政治や社会の変貌の著しさを伝えている。例えば、「自立」急ぐロシア農民(1993年6月7日・朝刊)は、個人農家が増え、国営農場、集団農場が協同組合や企業に変わり、既にロシアでは社会主義時代の農業システムが崩壊しつつあることを伝え、「ロシア海軍観艦式に海自艦」(1996年7月29日・朝刊)は、かつての“仮想敵国”ロシアが、海軍創立三百周年式典に日本の海上自衛隊を招待し、外国の報道陣にミサイル巡洋艦内部を公開するなど、全くの態度の変わり様を見せていることを伝えている。
- (2) 政権闘争、民族紛争、テロ事件などの問題を抱え、ロシアが混迷の状況にあることを強調している。例えば、「二期目のエリツィン1～6」(1996年7月5日～11日連載・朝刊)は、大統領の健康不安を原因とする後継者争い等、エリツィン政権下のロシアで発生している諸問題について伝えている。また「危機のバレストロイカ 燃えあがる民族紛争1～5」(1990年1月26日～31日連載・朝刊)のように、民族紛争についての特集記事が組まれることもよくある。
- (3) ロシアが日本にとって依然信用できぬ、警戒の解けない対象であることを印象づけている。例えば、「対ソ改善に悲観的 本社電話調査」(1991年4月26

日・朝刊)は、まだ日本人の多くが日ソ関係改善に悲観的であることを伝え、「北方領土国後島 中国人が農作業従事」(1996年7月7日・朝刊)は、中国人労働者のロシアのビザによる北方領土渡航について、外務省がロシアの北方領土主権を認める行為として不快感を表していることを伝えている。また、「先見えぬ ソ連の核管理」(1991年12月17日・朝刊)のようにソ連の核管理の不安定さを指摘する記事、「旧ソ連、日本海に毒ガス投棄」(1993年5月11日・朝刊)「旧ソ連の核ミサイルが91年 サハリンの沖に沈む」(1993年6月5日・朝刊)のように旧ソ連軍、ロシア軍が度々、突拍子もない危険な行動や事故を起こすことを懸念する記事もよく見られた。

これらの傾向は以下のことを表わすものと考えられる。まず、(1)は、日本人がロシアの政治や社会の変貌の著しさを感じていることを表わしている。次に、(2)は、日本人がロシアの政治、社会を常に混迷の状況にあると見ていることを表わしている。(3)は、ロシアに北方領土問題解決への取り組みの姿勢が見えないことに加え、ロシアが核管理の不安定さや度々の危険な行動、事故で周辺諸国にまで不安感を与えていることから、日本人がまだロシアに対し警戒心を解いていないことを表わしている。つまり、これらの傾向からは、現在の日本人の対ロイメージの中に、“政治、社会が著しく変貌している”“混迷の状況にある”“まだ警戒すべき国”といったものが含まれていることが理解される。

3.2 経済

まず、ブラウダ紙の日本に関する記事の内容には主に以下の二つの傾向が見られる。

- (1) 日本の高度な技術を評価している。例えば、「日本:スーパーコンピューター開発される」(1990年1月19日)「マイクロカセットテープ」(1990年1月24日)は、日本の電機メーカーの最新製品を紹介し、「“日本の頭脳”が入った爆弾」(1991年4月24日)は、湾岸戦争で米軍が使用した武器に内蔵されていたコンピューターのほとんどが日本製であったことを報じ、日本製品の性能の高さを伝えている。
- (2) 日本の奇跡的な速さによる経済成長を評価している。例えば、「成功の公式」

(1991年4月15日)は、日本の経済発展の秘訣を日本人の“教育水準の高さ”“勤勉さ”“従順さと規律正しさ”“集団倫理”と分析し、日本人のまじめさや努力家ぶりを高く評価している。

こういった傾向が表わしているのは次のようなことであると理解される。まず、(1)は、ロシア人が日本に対し、技術の高度に進んだ国として尊敬の念を抱いていることを表わしている。次に、(2)は、ロシア人が日本に対し、第二次大戦後の荒廃した状況から奇跡的な経済成長を遂げた国として、尊敬の念を抱いていることを表している。つまり、これらの傾向からは、現在のロシア人の対日イメージの中に、“尊敬すべき技術大国”“尊敬すべき経済大国”といったものが含まれていることが理解されるのである。

次に朝日新聞のロシア・ソ連に関する記事の内容には主に以下の二つの傾向が見られる。

- (1) ロシア経済の悪化ぶりを強調している。例えば、「ソ連経済の危機深刻化」(1990年1月13日・朝刊)は、放漫財政を原因とする物資不足・物価高騰で市民生活が以前より悪化していると指摘している。また、「陰しい生産量回復への道」(1991年12月6日・朝刊)は、政府の補助金減や掘削設備老朽化のため、西シベリアの油田生産量が低下していることを、「ロシアでは給料代わり ナベ・ヤカン」(1996年8月10日・朝刊)は、役所や製造業で給料不払いが頻発し、給料代わりにナベ、ヤカンを支給している食器工場もあることを紹介している。
- (2) ロシアを日本にとって利益の見込める市場として伝えている。例えば、「停滞? 加速? 日ソ経済1～5」(1991年4月9日～13日連載・朝刊)は、ロシアでの資源開発に莫大な利益が期待できることを伝え、「商社トップ続々ロシアへ」(1996年9月7日・朝刊)は、日本の大手商社が対ロ投資に積極的になりつつあることを伝えている。

ここで解釈されるのは以下のようなことである。まず、(1)は、日本人がロシアを深刻な経済状況にあると見なしていることを表わしている。(2)は、日本人がロシアに将来性のある市場として期待を寄せていることを表わしている。つまり、これらの傾向からは、現在の日本人の対ロイメージの中に、“経済状況が悪い”“将

来性のある市場”といったものが含まれていることが理解されるのである。

3.3 文化

ブラウダ紙の日本に関する記事では文化関係のものは非常に少ないが、そういった記事の内容の場合はたいいてい、日本を近代的な事物と伝統的な事物が混在した国として印象づけることで共通している。例えば、「レンズからのぞく日本 奈良、春を迎える」(1991年3月29日)は、奈良公園の様子を大仏、鹿、デートを楽しむ若い恋人たちで描写し、大仏に象徴される“伝統文化”と鹿に象徴される“昔ながらの自然”、そして、若い恋人たちに象徴される“現代”との調和した情景を興味深く伝えている。つまり、この傾向からは、現在のロシア人の対日イメージの中に、“近代と伝統が調和した国”といったものがあることが理解されるのである。

次に朝日新聞のロシア・ソ連に関する記事の内容では主に以下の二つの傾向が見られる。

- (1) 市民生活に自由な雰囲気が見われてきたことを伝えている。例えば、「マック攻勢にモスクワ陥落」(1990年2月1日・朝刊)は、モスクワに開店した米国の有名ハンバーガー店が大勢の行列客で賑わっていることを伝え、「新しいモスクワ」(1990年2月5日・夕刊)は、モスクワの新しい前衛演劇・劇団の活動を紹介し、「アレクサンダー・グラツキー」(1991年4月15日・夕刊)は、数年前まで“地下活動”に近い状況にあったソ連初のロック歌手が、最近では日本のNHK紅白歌合戦に出演するなどの活動をしていることを伝えている。
- (2) 日本にとってロシアが身近になってきたことを印象づけている。例えば、「“輸入”ボクサー奮戦中」(1991年4月14日・朝刊)は、ソ連出身のボクサーたちの日本での活躍を伝え、「日ロ市民が酸性雨調査」(1993年6月30日・朝刊)は、日ロ市民が酸性雨共同調査を行ない、草の根日ロ交流を進めていることを伝えている。

以上の傾向からは次のように考えられる。まず、(1)は、ソ連時代が終わり、ロシア市民に自由な生活が戻ってきたという印象を日本人が受けていることを表し

ている。(2)は、日本人が以前よりはロシアを身近に感じるようになっていることを表わしている。つまり、これらの傾向からは、現在の日本人の対ロイメージの中に、“市民に自由が戻った”“以前よりは身近な国になった”といったものが含まれていることが理解されるのである。

4 現在の互いのイメージとその比較

ここで、これまでの分析の結果を整理してみよう。まず、ロシア人が現在、日本に対して、“米国勢力圏の一国”“同じ第二次世界大戦の犠牲国”“北方領土問題にやや執拗”“尊敬すべき技術大国”“尊敬すべき経済大国”“近代と伝統が調和した国”といったイメージを抱いていると分析された。そして、日本人の方は現在、ロシアに対して、“政治、社会が著しく変貌している”“混乱の状況にある”“まだ警戒すべき国”“経済状況が悪い”“将来性のある市場”“市民に自由が戻った”“以前よりは身近な国になった”といったイメージを抱いていると分析された。

では、これまでの分析の結果から、現在のロシア人の日本観、日本人のロシア観とそのギャップについて論じたいと思う。まず、ロシア人の対日イメージには、“米国勢力圏の一国”という、いわゆるロシアのライバル国の味方というイメージや、“北方領土問題にやや執拗”といったネガティブなものが存在するものの、“同じ第二次世界大戦の犠牲国”という日本への親近感や“尊敬すべき技術・経済大国”“近代と伝統が調和した国”といった評価もあり、全体的に見るとポジティブなイメージの方が強いと言える。

次に日本人の対ロイメージの方には、“将来性のある市場”“以前よりは身近な国になった”“市民に自由が戻った”のような、明るいポジティブなイメージも出てきている。しかし、それでも、こういったイメージはまだ弱い。一般には“混乱の状況にある”“まだ警戒すべき国”“経済状況が悪い”といったネガティブなイメージの方が遥かに強い。互いのイメージを比べてみると、ロシア人の日本観は比較的ポジティブで、日本人のロシア観は概してネガティブであるということになる。しかし、以下のことをつけ加えておかなければならない。確かに、ロシア人の対日イメージはポジティブな方である。しかし、その対日イメージをよく観察してみると、全体的に“国”としての大きく漠然としたイメージにとどまっていることに気づくのである。そこに個々の日本人のイメージを見出すことは難しい。つまり、ロシア人が日本に対し抱くイメージは詳細でなく、漠然としてい

とも言えるのである。そして、一般にロシアでは日本に関する新聞記事の量は少なく、ロシア人の日本への関心は、どちらかと言えば低い方であると言わざるをえないのである。

さらには、日本人の対ロイメージが上述のようであるにせよ、そのイメージ自体はロシア人の対日イメージに比べればもっと多様であることも指摘しておかなければならない。そして、ネガティブな内容が多いにしても、日本ではロシアに関する新聞記事は連日何か書かれており、日本人のロシアへの関心が意外に高いことがうかがえるのである（ロシアが米国と並ぶ大国であることや北方領土問題が、その関心を高めていると思われる）。

ロシア人の日本観と日本人のロシア観は実に正反対にあり、そのギャップの大きさは、現在もあまり変わっていないようである。

5 マスメディアの影響

結局、ロシア人の対日イメージ、日本人の対ロイメージのどちらも、内容的にはペレストロイカ期以前とあまり変わっていないように感じられる。ロシア人の日本観には、進んだ技術や経済、米国の影響、近代と伝統の調和といった従来のイメージが継承されており、目新しいイメージは特には見られない。

日本人にとっては、ロシアはまだ潜在的に危険で警戒すべき国で、依然“軍事大国ソ連”のイメージが強い。これは、2.2 で述べた日本人が“ソ連から多大な被害を受けた”経験や北方領土問題に対する不満に根差す部分が大きいため、仕方がないこととも言える。また、かつての“自由のない社会主義大国”というイメージは消えたが、今度は、政治・経済・社会の混乱した“無秩序な大国”というイメージが台頭している。これは要するに、後者のイメージが前者のイメージに取って代わり、“病んだ大国”という路線のイメージを引き継いでいることに過ぎないのである。つまりは、ロシアは現在も、“危険”で“病んでいる”大国なのである。結論として、ロシア人の日本観、日本人のロシア観はペレストロイカ期以降もあまり変わっていないと述べても良いであろう。しかし、なぜ変わらないのか。その大きな要因として、両国のマスメディアの影響を指摘しておきたい。

先に述べたように、新聞を始めとするマスメディアの外国報道とは、そのマスメディアを利用する国の国民がその外国に対し抱くイメージを反映するものであ

る。しかし、マスメディアがそういったイメージを誇張したり、その外国に対しマスメディア自体が抱くイメージにそって報道を行なってる面はないのか、といった問題にも注意せねばならない。ロシアの対日報道に現われる日本、日本の対口報道に現われるロシアの姿が常に画一的であるなら、ロシアの対日報道、日本の対口報道の在り方にもっと注意してみる必要がある。

まず、ロシアのマスメディアの対日報道について。ロシアのマスメディアは日本の技術や経済をよく褒める。それらを“日本の奇跡”という言葉でもてはやすこともよくある。しかし、褒めるのは良いがそこから先に議論を進めようとなない。日本の成功は日本人の国民性ゆえに実現できた“奇跡”であり、国民性の全く違うロシア人に同様の成功は無理である。それゆえ、ロシア人にはあまり役立たず身近でない話題をそれ以上提供しても仕方ない。こういった論理がロシアのマスメディアの対日報道には見られる。日本を“技術、経済が進んでる”の一言で片づければことが済む、という安易な報道姿勢があるのである。

また、前述のように、ロシアの新聞では日本に関する記事の量は一般に少ない。これはテレビ放送など他のマスメディアにも言えることである。ロシアのマスメディアの外国報道は一般に、欧米諸国に関する情報に偏りがちで、アジア諸国に関する情報は少ない傾向にある。ロシア人がアジア諸国よりも欧米に対し高い関心を抱いていることは確かである。しかし、ロシアのマスメディアは外国情報のバランスを考慮し、アジア諸国に関する情報も増やし、ロシア人にアジア諸国について知る機会をもっと多く与えても良いのではないか。日本に関する情報がさらに増えれば、漠然としたロシア人の対日イメージもいくらか詳細なものになってくるのではないかと思われる。

次に、日本のマスメディアの対口報道について。ロシアに関する日本の新聞・雑誌の記事の見出しやテレビの特集番組のタイトルなどを見ると、日本のマスメディアがどのようにロシアについて報道しているのかがよくわかる。例えば、今回調べてきた朝日新聞の場合、見出しに“混乱”“苦悩”“混迷”“危機”といった、ネガティブな意味合いの言葉が頻繁に使われていたことに気がつく。日本のマスメディアが伝えるロシアに関する情報には、こういった言葉がつきものである。つまり、日本のマスメディアは前述の“病んだ大国”のイメージにそって言葉を選びロシアを伝えているのであり、ロシアを偏見的に扱ってると言わざるをえない。また、最近ではオウム真理教とロシアを結びつけた報道が大々的に展開され、日本における対口報道はさらに偏見的になっているように感じられる。長い歳

月の間、日ロ市民はイデオロギーの壁に遮られ、戦争を介する以外、互いを直接見る機会にあまり恵まれず、得られる情報も一定であったため、互いのイメージはどこかいびつであったり誇張されていたりした。現在、日ロ関係は変化したが、互いのイメージはまだそれほど変わっていない。マスメディアの影響はその重要な要因であったと言える。

現代のロシア人の対日イメージ、日本人の対ロイメージに影響を与えているものはマスメディアの情報だけとは限らない。例えば、文学作品や映画などによって伝えられる情報もある。しかし、こういったものがそれほど大きな影響を及ぼしているとは考えにくい。ロシアの場合、日本文学や映画は読書好き、映画好き、日本好きの人々や知識人たちをのぞくと、一般にはそれほど普及しておらず、日本の場合も、若い世代の読書離れが進み、現在ではロシア文学は以前ほどよくは読まれなくなり、ロシア映画もやはり映画好き、ロシア好きの人々や知識人たちくらいにしか親しまれていないからである。

しかし、マスメディアの場合は、そういったものとは異なり、一定の層に限らず、一般大衆の幅広い層に大量の情報を伝え広めているため、互いの国のイメージ形成においては遥かに大きな影響を及ぼすものと考えられる。つまり、我々は常にマスメディアのつくる疑似環境の中に暮らしているため、我々の抱く外国イメージに対しマスメディアは重大な責任を持つのである。対日報道、対ロ報道に際して、両国のマスメディアにはこの責任をより深く認識することが必要である。それにより、今後のロシア人の対日イメージ、日本人の対ロイメージにもいくらかは変化が現われてくるものと考えられるのである。

参考文献

- В. Овчинников, Ветка сакуры, М., Молодая гвардия, 1975.
В. Овчинников, Японская Панорама, М., Планета, 1975.
В. Я. Цветов, Пятнадцатый Камснь Сада Рсанди, М., Политиздат, 1986.
“Я и Россия” (25 писем, присланных в редакцию газеты “Токио симбун”), Япония о себе и мире, дайджест, №.2, Февраль, 1994

志水速雄『日本人はなぜロシアが嫌いか』山手書房新社、1992 年
中村喜和、トマス・ライマー（編）『ロシア文化と日本』彩流社、1995 年
木村汎「日本との関係」『もっと知りたいロシア』弘文堂、1995 年